

森羅の散策

I 幻化

〈五感が命じるままに
どこにもない場所まで歩いて行ってみたら
いいじゃないか〉、と
モルトくさい息で老人は 言い放つ。

ピチツ！ と グラスの氷がはじけ しじまがひろがる
網戸のむこうから 電子蚊取り？の 芳香か
忘れかけたなにかを誘うように ただよってくる

縁側に出てみると 白うすみどりにあでやかなうなじ
テッポウユリが闇にむかい 花卉を開きはじめている

合成香料に馴化される現代人の幻影マリーヤだったのか！
〈錯覚〉ですむのなら よいけれど…

見るもの
聴こえる音

匂い

味わい

肌さわり

…

五蘊皆空 と

となえるとき

〈春の花にあくがれいずる〉ポエジーは霧散する…

〈気色けしき吹くだに悲しき秋風〉に 新月の冴えわたり

〈なにやらゆかしすみれ草〉は 枯れ葉の下に紛れ

〈言葉なんて知るんじやなかった〉と 言葉で語る反語

五感はなにも命じない、解き放たれても
感覚の奴隷は空蟬の宴によるこびをみいだす

大根のように傷つきやすく 他者ひとの痛みには鈍い感受性と
馬毛の弦のようにざらつき 張りすぎて切れやすい神経と

きみはこころの刹那を織り
ぼくは今ここの異和を織る

深夜のテーブルライトにうかぶ 炎の柰目がいつしか幻化する
〈永遠〉を循環する弁証法がメビウスの輪となって燃え上がる
だまし絵の 火の輪くぐりなのか

いつか来た道は どれもこれも燃えている
…ように思えた

だれもがたどるその轍
あるいは くびき
あるいは 足かせ

あるいは ……

森羅の散策

II 幻野の道

そのふるえる舌に修羅を宿らせ きみは
ツクサに輝くひとしづく

渴いたところに滴らせようと 目をとじる

こころの平和を

戦い取ろうとする

傷だらけの老いた少年

ひとつのおもいが二輪草のようにたもとをわかち

背をむけあいはじめると

ゆめの番人は海馬の黙示録を 配達してくる

たとえばシャワーを浴びていて ふいに訪れることばであり
あるときは目ざめまぎわに 脳裏にひらめく光景であり
送り主はきみの中の見知らぬ者……

つまり、わたしというたどり着けない洲しま

きみの影であり、その父であり、その母であり

五感の知りえない領土に君臨する盲目の王

〈わたし〉は

……いつも同じ光景の 薄暗がりの中で途方にくれている
帰るべきところに帰ろうとしているのに 迷路はひろがるばかり
ぼやけた絵地図に はるかな月日を振り返る……

幼いころ どこかしら魄まがひを落としてきたのだろうか

夢は時空をこえて

〈わたし〉は

見え隠れする道をかけめぐり求めるけれど もはや
戻れないのであれば、戻ろうとしないこと……なのだろう

迷っているのは
〈わたし〉ではない

ひとは

〈わたし〉という思い違いによって迷い

〈わがもの〉という思いによって憂え

幻影に立ち尽くす日々がある

たとえば

かけがえのない命というも

仮の宿に過ぎない

これ有るに依りてこれが有る

これ無くしてまたこれも無し

どこから来て

どこに行くのか

すでに焼き終えた野原に

火はもどつてこない、と

こころを定め

犀のように

ただ独り

歩め

森羅の散策

Ⅲ 五柱の元に

聖地バラナシ 最期の旅の尽きるところ
五つの鐘楼をもち 五柱をまつる石造りの寺院

夢ではなく トリップでおとずれた
どこでもない 場所

今 目の前に聳え立ち
魂の奥深く 前世に聴いたヴィーナがひびいている

早朝の〈ラーガ古典音楽〉 シンドウ・ウアイラビ 神へのいのり。

スベテ ヨ ハ コト モ ナシ

不意にヤモリが天井から左肩に落ち
二の腕ヒヤリ!と しがみつく

ミルクで煮出したチャイを飲んでいた
熱帯の夜…

闇の中でときおりゴキブリをとらえ
クシャクシャと音たてたべる このそこつもの

『神々の深き欲望』からころげおちてきた「幸運のつかい」らしい。

汗ばむはだかの胸のうえを小動物が横ぎり
足跡をのこし走りすぎてゆく

石の床にゴザを敷きねむっている
夏のあけ方…

耳の長いミツキーマウスの
とおり道をふさいでいるじやま者さ

明るすぎる文明から 電灯のない世界に逃げ出してきたものどうし。

アルタミラ洞窟画の瘤牛が

中庭から部屋に入ってきた

撰氏五〇度以上の熱をおびた石壁に打ち水をして

かろうじて息をしている午後：

追いつけても 舞い狂う陽炎を前に動こうとせず

日が少し傾いてから 壁に染みこむように去っていった

ことの葉を食み反芻し発酵させる 〈のろま〉な神の使いめ！

乾ききった土色の世界に

虹色の花びらが舞い降りた

倍音ゆたかなシタールの共鳴音を

万華鏡で照り返すシルクのサリー

花の髪飾りの香りと 若い娘の匂いに

シンドウ・ウツアイフヒ
〈天への祈り〉が途絶える

声楽と踊りを躰けられた 導師ツルの愛娘よ。

これは三千年前の 〈ころら彩るもの〉である

導師ツルは詠唱する

DHA SA RE GA PA MA GA RE SA

SA RE GA MA RE GA SA RE SA

不立文字の音の進行を

旅人は文字で採譜する

どのように言葉や音符を使いまわしても

この魂の祈りを あらわすことも伝えることもできない。

言葉のあや織

けれど
共鳴弦がありさえすれば
微けくも響き合うだろう

だれかのこころに
いつか、どこかで

ナーダ： (音・音楽) は
ブラフマ (神の声) なり